

高丘 アイシン 植物由来の成型炭開発

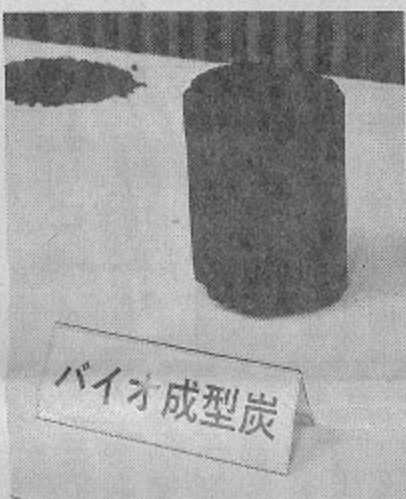
世界初、溶解炉「キュポラ」向け

アイシン子会社で、自動車の製造部品などを手掛けるアイシン高丘(本社豊田市)は28日、金属を溶かすための溶解炉「キュポラ」向けに、植物由来の燃料「バイオ成型炭」を世界で初めて開発したと発表した。

エネルギー使用量が大きい溶解工程で、石炭由来から植物由来のバイオ成型炭に燃料を置換することで、二酸化炭素(CO₂)排出量を抑える。2025年度か

ら自社工場での使用を進展め、30年度までにキュポラ向けの燃料全てをバイオ燃料に置き換えたい考えだ。

開発した燃料は、パーム油の精製過程で排出される「ヤシ殻」を炭化、粉碎し成型している。ヤシ殻の油分の多さに着目し、独自の製造技術を確認した。溶解炉や製品への影響について実証評価を繰り返し、石炭由来の燃料と置き換えられることを確認した。



開発したバイオ成型炭

原料となるヤシ殻は、インドネシアなどで生産されているヤシ科のアブラヤシから、パーム油を

精製した際に排出される。アブラヤシが成長する過程でCO₂を吸収するため、燃焼時に排出するCO₂と相殺できるといって考えた。

内田信隆社長は「原料や品質の課題はまだあるが、業界全体を引っ張っている技術。これまでの製造設備をそのまま使用できるため、大きな投資ができない中小企業の脱炭素化にも貢献ができると考えている」と力を込める。